

W39a 全天 X 線監視装置 MAXI 搭載 SSC の初期運用状況報告

木村公、常深博（大阪大学）、富田洋（JAXA）、MAXI チーム

全天 X 線観測装置 MAXI は国際宇宙ステーション ISS の『きぼう』組み立てミッションの最終段階として、7 月にスペースシャトルで打ち上げられる。MAXI は 90 分で地球を一周する宇宙ステーションの動きを利用して 0.5~30keV のエネルギー帯域を全天モニターする。検出器としては 12 台の比例計数管から構成される GSC (Gas Slit Camera) と 32 枚の CCD から構成される SSC (Solid-state Slit Camera) が搭載される。CCD は浜松フotonix社製の 1024×1024 ピクセル素子で $2.5 \times 2.5 \text{cm}^2$ の受光面を持つ。CCD にはペルチェ素子が内蔵され、アクティブに温度制御が可能である。エネルギー分解能は素子により個性はあるものの、5.9keV で 150eV (半値幅) を達成し、ノイズレベルは $10e^-$ を十分下回る。

本講演では、八月頭の電源投入後に予定されている、SSC の初期チェックアウトについて報告し、またできる限り最新の運用状況について速報を行う。